

# 中世英文学にみるデーン人とヴァイキング

小林 絢子

日本語で「海賊」と訳せる「ヴァイキング」(vikings)はエリザベス朝の「海賊」やカリブ海の「海賊」(pirates)とは活動した時期と場所が異なる。またその活躍期が古かったこともあって彼らは当初の目的であった略奪をした後、場所によっては定住したことが多かった点もその後の海賊たちと異なる。

ヴァイキングは9世紀から12世紀にかけてスカンディナヴィアから海外に出て行って、英国をはじめとするヨーロッパ沿岸地方やグリーンランド、アイスランド等を襲って略奪や侵略を繰り返した。英国は彼らにとって近くもあり、肥沃でもあるところから彼らの活動の初期787年にはすでに南部ドーセットに来襲され、793年には北方のリンデイスファーン修道院が蹂躪された。その凄惨な記録は英文学、特に歴史物や年代記に見られる。しかし、当時まだノーサンブリア、マーシア、ウェストサクソン、ケント等の小王国に分かれていた英国島の住民は死力を尽くして反撃し、9世紀のウェストサクソンのアルフレッド王の時代にはヴァイキングのグズラム王との講和を果たした(ウェドモア条約; 878年)。その後も彼らの略奪や蛮行は続いたが、グズラム達のキリスト教化、ヴァイキングの中でもノルウェー王となったオーラフ・トリグヴェーソン(在位995-1000)による同部族のキリスト教化、それに続くアイスランドへのキリスト教導入およびデーンゲルドによる懐柔や婚姻等によって彼らの活動は徐々に沈静化し、彼らのうちの多くが英国島をはじめヨーロッパ周辺の島々や北フランス、更にアイルランド、グリーンランドなどで土着化していったことは有名である。

ヴァイキングが活躍していた時期に英国の有識者即ち記録や韻文等を書いた人々は彼らのことを何と呼んでいたのでしょうか。上記のドーセットやリンデイスファーンのように英国の中でも南と北に離れた場所に彼らが来襲した場合、記録者は統一呼び名を書き記そうとは意図しなかったに違いない。一般的に「北から来た人」という意味でNorseman (north man) またはその形容詞 nord-を使ったと思われる。事実、彼らの子孫が北フランスに建てた公国はNormandy (Norsemanの国) という。(同国のウィリアム公が1066年に英国に入ってきて英国王ウィリアム1世となったことは余りにも有名。) 言語についていえばヴァイキングが英国にもたらした借入語はOld Norse (古期ノルド語) といってスカンデナヴィア全体の古語を指す。しかし、後に詳しくみるが、英文学特に「アングロ・サクソン年代記」(*The Anglo-Saxon Chronicle = AS Chron*) のその頃の記述を見てもNorseとかそれに類似した表現は出てこない。大抵がDanes (Dene とその活用形) である。この呼び名とヴァイキングとはどのような関係にあるのでしょうか。

まず viking は vik- 'creek, inlet, bay' (海に注ぐ小川、入江、湾) と ingr-'ing' (子孫) 即ち「海の入江や湾からきた、もしくはそこへ住む、あるいはしばしば行く人々」という意味であるといわれる。<sup>(1)</sup> 入江や峡湾を多く持つスカンデナヴィア半島は当時人口増加によって土地が不足しつつあったとか、速度の速い竜骨船の建造技術が発達したということがヴァイキング発生の理由としてよく挙げられるが、冒険心に富んだ若者を育成する jomsviking の制度の創設<sup>(2)</sup> も力があったことであろう。しかし、その呼び名は漠然としすぎている感が否めない。「北からの人々」のほうはまだ方向性を示しているだけはっきりしている。記録者や語り部のような人々は自分達の不倶戴天の敵に対してもっと強い認識はなかったのでしょうか。

英国島の侵略者達の呼称としては1時代前のアングル人、サクソン人、ジュート人は多少音韻変化はあったにしてもそれぞれヨーロッパ大陸での故地の名で呼ばれていたらしい。しかし彼らの英国定住後、新たに招かれざる客としてやってきたもっと北からの彼らは故地の詮索をしたであろうか。例えば

「英国国民教会史」(*The Ecclesiastical History of the English Nations*)をラテン語で著したビード師(Reverend Bede; ca.673-735)はジュート族がケント地方に植民地をつくったと記述している。<sup>(3)</sup>しかし一般的にはASChronに見られるように北方からの侵略者は前述のようにDanesと呼ばれていた。そこでDaneという呼び名を調べてみよう。

Danes (Old English "Dene") ときくと私たちはふつう「Denmark人」と感じる。mark<sup>(4)</sup>がboundary(境界)と知るとなおDaneとDenmarkの関係は近く見える。しかしスカンディナヴィア半島にやや食い込んだ形のユトランド半島とその根元にあるドイツ北部に隣接する土地を「デンマーク」と決め、民族名ひいては国名としたのはそんなに昔のことではない。現代のスカンディナヴィア三国の歴史をみるとスウェーデンは4世紀にメーラレン湖付近に形成されたといわれるが、政治的統一とみられるものは9世紀にウプサラを中心に発達したという。<sup>(5)</sup>それはまだ狭い地域であり、南部は隣国デンマークの支配下にあった。王権は弱体でキリスト教化も遅れたため、13世紀になってドイツのハンザ同盟の支配下に入ったりして、14世紀後半にいたるまでスウェーデンでは政治的に不安定な状態が続いた。ノルウェーは今のノルウェー地方即ち海岸地方の人々(スウェーデンと同じく北ゲルマン人)が古くから漁業や交易、略奪を含む航海をしに海外へ出て行ったことはわかっているが、その結果として前述したグリーンランドやアイスランドの入植に成功したことがその初期の歴史の中では輝かしい局面として残っているだけである。国としては氏族が跋扈し、ハーラル美髪王によって9世紀末に今のノルウェーの国土にあたる地域の大半が統一された後も王権は確立されたとはいえなかった。有名なオーラフ・トリグヴェイソン(在位995-1000)やオーラフ2世(在位1016-1030)も出たが後者は英国王も兼ねた強力なデンマーク王クヌートに敗れた。ノルウェーはその後国王がカトリック司教と対立したり、気候の変化や疫病で苦しみ、王権は安定せず、隣国であるデンマークに隷属し続けたといわれる。<sup>(6)</sup>ホーコン4世の時代、1217年に独立王国となったが、14世紀、15世紀を通じてスウェーデンと同様にカルマル

同盟の縛りによって、デンマークとの関係を密接に保つよりほかなかった。そしてその三国同盟の国の王たちは歴史家デュロッセルの言うように<sup>(7)</sup> ヴァイキングの子孫であるスカンディナヴィアの各部族の長の支持なしには統治できなかったのである。

そして今回の課題である「デン人」(Danes)即ち英国ではヴァイキングの異名のようにいわれているデンマークの人々の歴史であるが、デンマークはまさに北欧三国のヴァイキング時代の初期に台頭した国であった。彼らはまずヨーロッパ最強といわれたシャルマーニュ(742-814)に対抗して東方のシュレスヴィヒに大きな土塁 Danevirke を築いたことで知られた。それから前にみたように英国や北フランスで略奪と定住をはじめ、クヌート王の時にデンマーク・イングランド連合王国(イングランド王1016-1035; デンマーク王1019-1035)をつくって最盛期を迎えた。その後のデンマークはドイツのハンザ同盟と競い合いながらカルマル同盟を主導して、スカンディナヴィア三国にゆるい連合王国を存立させることを成し遂げた。クヌートが長生きしてデンマーク・英国両国ばかりでなくノルウェーやスウェーデンの一部にまで勢力を伸ばしていれば英国の歴史も大きく変わっていたであろうと思われるが、彼の息子たちは短命で、英国は結局は彼の後妻のエマとエマの前の夫である英国王エゼルレド2世との間の子エドワードが継ぐことになって英国系が再び咲いたことは周知のことである。

以上みてきたようにスカンディナヴィア三国では中世では各王権が独立して国名や民族名を名乗る状況に至っていなかった。さて、英国のリンディスファーンを襲ったのはノルウェー系ヴァイキングであったという。彼らの関心がアイルランドに移ったあと英国を襲ったのはデンマーク系ヴァイキングであった。<sup>(8)</sup> 彼らのことを英国人は押しなべて「デン人」と呼んだわけであるが、ヨーロッパの彼らの故郷ではまだ国名または王朝名と民族・部族名との関係が確立していなかったことは見てきたとおりである。それではヴァイキング時代以前の英文学に出てくる Danes とはいったいどのような人々だったのだろうかといことを具体的な作品の中で見てみよう。

8世紀に英国の吟遊詩人によってうたわれ、10世紀の1つの写本 (Cotton Viterius A VX) によって伝えられている「ベオウルフ」(*Beowulf*) の場合、Danesという呼称はスカンディナヴィア半島ではなく、その南方の対岸であるユトランド半島のごく一部の民族名をさして使われている。

しかし遠い地中海沿岸地方のラテン人からみれば Danorum (rex) といえは Klaeber の "the powerful Danes were taken as the representatives of the Scandinavian tribes" という記述からもわかるようにスカンディナヴィア地方の部族の全体的名称であった。<sup>(9)</sup> 「ベオウルフ」について言うところには表題名の主人公がフロスガー王のために怪物グレンデルとその母の女怪を退治し、故国に帰って叔父にあたるヒェラークのあとを継ぎ、最後に火をふく竜と闘う物語詩である。ベオウルフ自身はイェアート族 (Geat) であり、フロスガーはデーン族 (Dene; Dane) である。デーン族の祖先にベオウルフという人がもう一人いる。他にスウェーデン族 (Sweo) のオンゲンセーオウの話やフィン族の挿話にも出てくる。つまり7, 8世紀ごろにはデーン族は前述したように現在のデンマーク南部、ドイツ北部の沿岸地方の部族だったので。そのデーン人と200年位後にあたる時代に広くヴァイキングとして活躍し、同じく沿岸といってもフィヨルド (峡湾) を見渡せる入り江から海を越えて他国に來襲したデーン人が同じ氏族名で呼ばれている。もちろん広い意味では北方人ないしは北方ゲルマン人として同じ部族であろうが文学上ではその初期には狭義で使われ、次第に広義で使われるようになったのではないか、ということをして「ベオウルフ」と *ASChron* 中の Danes の用法を比べることによって見てみることにする。

「ベオウルフ」の冒頭に出てくる有名な "HWÆT, WE Gar-DEna (sic.) in geardagum, peodcyninga þrym gefrunon..."<sup>(10)</sup> という時の "Gar-Dena" は「槍使いの上手なデーン人」と訳され、この物語の舞台となるデンマーク地方の部族を修飾している呼び名である。この呼び方は同詩の601行、1856行、2494行にも対格複数や与格複数の gar-Dene の形であらわれている。似たような修飾のついた呼び方に hring-Dene ('ring-Danes') があり、これ

は現代英語では corslet-Danes 即ち「鎖かたびらを着たデーン人」の意味である。116行、1279行、1769行に出ていて、いずれも gar-Dene と同じくフロスガーの属するこの物語の中心的部族をさしている。また、フロスガー王はベオウルフから Beorht-Dene ('bright Dane') 「輝くデーン人達の王」という尊称で呼ばれている。

この詩では時々地理上の全方位型でデーン人を呼んでいることも興味深い。東の、北の、南の、西のデーン人といっても全部フロスガーの属するデーン人を指しているのだ。例えば、392行ではフロスガー王は「東デーン人の王」 'aldor East-Dena,' 616行では 'East-Dena epelwearda' と言われ、828-829行にはイェーアト族のベオウルフに助けられた東デーンの人々という表現 (Hæfde East-Denum / Geatmeca leod gilp gelæsted) がある。それなのにそれに関連した箇所即ちグレンデルが鹿殿を襲ってきてベオウルフと闘う所 (783-784行) では、その周辺部にいたフロスガーの手下たちのことを「北デーン人」と呼んでいる (Norð-Denum stod / atelic egsa)。一方、フロスガー達を「南デーン人」と呼ぶ時は、作者に「遥々北方から南方に下ってきたデーン人 (に助勢する)」という気持ちがあるように思われる。ヘアゾラーフの挿話の中にベオウルフの父がヘアゾラーフと敵対していたという文脈がある。そこでフロスガーは 'Ðanon he gesohte Suð-Dena folc . ofer yða gewearc, Ar-Scyldinga' (463-464行) 「従って彼 (ヘアゾラーフ) はわれらデンマークの民を求め、われら誉れ高きシルドの民を求めて遥々やってきたのだ」と自分達を呼んでいるからである。また、ベオウルフがグレンデル退治の後、帰国して叔父ヒェラーク王にその事を報告した時、ヒェラークは「(グレンデル相手の戦いは) 南デーン人みずからの手で解決させるように」 'let Suð-Dene sylfe geweorðan' 1996行 と言っておいたのに、とフロスガー王達の不甲斐なさを嘆いている。これもヒェラークにしてみればフロスガー達のいるデーン地方は遥々南方にみえたことから発した表現と思われる。「西デーン人」についてみると、これはフロスガー王がベオウルフに初めて自分の土地で会って歓迎する時に使われている。彼は「ベオウルフは

われら西デーン人にグレンデルの恐怖と闘うために神がおつかわしになった」  
'Hine halig God / ... us onsende, / to West-Denum 381-383 行) と  
言う。また、ベオウルフが女怪を倒した時の解説 (1578 行) でもフロスガー  
と側近達を West Denumと呼んでいる。つまり、戦いの臨場感のある所で  
は自分たちを「西デーン人」と呼んでいるのである。

「ベオウルフ」における「デーン人」は「半デーン人」('Healf-Dene') と  
も呼ばれる。これはどういう意味であろうか。この詩ではデーン人の祖先は  
シルド (Scyld) で、その息子はこの詩の主人公のベオウルフではないベオ  
ウルフである。その息子が固有名詞の Healfdene という名前を与えられてい  
る。フロスガーはそのまた息子なのである。Klaeber は "Half-Danes" につ  
いて次のように言っている。

Half-Danes, as a tribal, or dynastic, name occurring once in  
"Beowulf" (l. 1069) can be traced in Scandinavian sources also  
... The old dynastic name "Healf-Dene" was ... supplanted by the  
name "Scyldingas" when a mythical ancestor, Scyld, had been  
introduced.<sup>(11)</sup>

シルド族が後にデーン族となるが、デーン族のすべてがシルド族からきた  
ものではない。だからシルドの孫にしてすでに半分デーン人というわけでそ  
れを固有名詞にしてもおかしくないであろう。それから、シルドの子孫と  
してフロスガーはデーン人という他にしばしばシルド族とも呼ばれる。その  
Scyldinga(s)も Guð-Scyldinga, Ar-Scyldinga, Heaðo-Scyldinga など様々  
な修飾語をつけられている。Healf-Deneはその中の Heatho-('戦いの')と頭  
韻を合わせる時に便利な言葉であっただろう。

次に制作年代は大分下っても、その記述内容は「ベオウルフ」時代もカバー  
する ASChron における「デーン人」の表現を見てみよう。Oxford English  
Dictionary では Danes は 9 世紀から 11 世紀に英国に来襲した北方人の総称  
である。<sup>(12)</sup> Northmans と Danes を無差別に呼ぶことについては、9 世紀の

アルフレッド王の書物である *Orosius* ではこの両者の区別をしていたという説もあるが、<sup>(13)</sup> 彼が編纂させたというこの年代記の場合はどうだったのであろうか。紀元の始まりから記してあるこの年代記の 825 年には「デーン人がコーンウォールに現れた」、そして「ウェッセックス王のエクバートがこれを撃退した」という箇所がある。しかし、彼らのことははじめはただ *micel sciphere* (大船団) と書かれ、続いて英国のウェッセックス王が *pa Deniscan* を敗走させた、という記述が続く。これが有名なヴァイキング来襲第 1 波であるが、その 40 年程前、略奪船団のヴァイキングとしては 793 年に既に北方のリンデイスファーンに来襲があったことは既に述べた。その時の *ASChron* の記述にはデーン人という名は無い。同年代記の *Laud* 写本に *heðenra manna* (異教徒) という単語が同じ文脈で使われているのみである。901 年の項に *Dena* という活用形が初めて現れ、その記述は以下のようである。

Se wæs cyning ofer eall Ongeleyn butan ðæm dæle þe under  
 Dena on walde wæs, and he heold þæt rice oprum healfum læs þe  
 xxx wintra.

ここはアルフレッド王が亡くなったことを述べている箇所。「彼はデーン人の支配下にあった地方を除いて英国全土を支配した王であった。そしてその王国を 28 年半保持した」という意味である。

以後あちこちで *Dene* という語が使われるが、多くの場合はただ *here* (軍隊) とか代名詞の「彼ら」即ち主格の「彼らは」は *hie, hi, hy, hig*, 対格の「彼らを」は *hie*, 属格の「彼らの」は *hira, hiera, hiora, heora, hyra, hera*、与格の「彼らに、彼らへ」は *him, heom* などであらわされている。当時はあまりに多くの来襲があり、王ばかりでなく地方領主たちもその対抗策には大変苦しんだので、「敵が来た、略奪・破壊をした、殺した、」という文脈で「彼ら」といえばデーン人を指すという暗黙の理解が成り立ってしまったよ



うでもある。910年の記述のように north here 即ち「北からの軍団」というように修飾がつくことはあるが、多くの場合は se here 「その軍団」というだけでデーン人のヴァイキングを指していたのである。時には micel folc 「大集団」とだけいっても彼らを指していた (921年) ことすらあったのである。そしてついに和平をお金で買うことがなされ、991年には man geald ærst gafol Deniscan mannum 「初めてデーン人達に貢納税を払うことが決められた」として歴史上名高い Danegeld (デーン税) が始まり、これもヴァイキングの子孫であるノルマン人による征服につながっていった。デーンゲルドは英国人 (アングロサクソン人) にとってデーン人の横暴から逃れるための屈辱的で悪名高い支払金 (ゲルド) だったのである。ここで年代記に出てくる彼らとの数多くの戦いを逐一記述することはできないが、古代の詩に出てくるヨーロッパ大陸を舞台としたデーン人と英国島で扱われていたデーン人とは随分立場や種類に差があったことを管見できたといえる。

以上見てきたことからわかるように中世英国の文学作品の中に見られる Danes という名称にはさまざまな適用範疇があった。一方冒頭でみた vikings は一言で言えば「入江の民」という漠然とした呼称であった。それはスカンディナヴィア半島の入江や峡湾と思われているが、オランダに近いフリジア諸島の湾も指していて、それらを含むアングロ・サクソン語彙集には sæ-wicingas という単語が 8 世紀から見出される。しかし、その後その使用は英語文献では途絶え、*Oxford English Dictionary* における同語の初出例は 1807 年の G. Chalmers による Caledonia である。ということは、この語は我々が「ヴァイキング」という人々が英国を侵略して略奪し、最盛期を迎えて、衰微してからようやく使われ始めたものだといえる。Danes と vikings は内容的に同じ集団を指したわけであるが時代によってまた文学作品のスタイルによって呼ばれ方にこのような差があったといえるのではないだろうか。

注

- (1) *Oxford English Dictionary*  
s.v. Viking
- (2) 青山吉信編 「イギリス史」第1巻 山川出版社 1995, p.175
- (3) Duroselle, Jean-Baptiste, tr. By Mayne, Richard,  
*Europe: A History of Its Peoples*, Viking Press, 1990, p.89
- (4) *Oxford English Dictionary*, s.v. mark
- (5) R.B. ロイン & 魚住昌良監訳「西洋中世史事典」東洋書林  
pp. 281-2
- (6) 同書 p.382
- (7) Duroselle, p.161.
- (8) スウェーデン系ヴァイキングは9-10世紀には東ヨーロッパに関心が  
向いていたという。大江一道、山崎利男 「世界史への旅」  
山川出版社、1981年、pp. 107-109.
- (9) Klaeber, FR. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, D.C. Heath  
and Co., 1950, p. xli.
- (10) 同書。大文字小文字の区別も同テキストによる。
- (11) 同書 p.cxxx.
- (12) *Oxford English Dictionary*, s.v. Dane; A native or subject of  
Denmark; in older usage including all the Northmen who  
invaded England from the 9<sup>th</sup> to the 11<sup>th</sup> century.
- (13) Plummer, Charles *Two of the Saxon Chronicles*, Clarendon  
Press, Oxford 1972, p.59.
- (14) テキストは同書、写本は文中に断りが無い限り Parker MS.による。